

それは魔法ではなく

埼玉県 所沢市立中央中学校

一年 伊藤 正義

父の転勤のため今の住まいに引っ越してきたのは、僕が四歳になる年の春だ。ここで僕は幼稚園、小学校を修了し、中学生になった。南関東の片隅にある築五十年の集合住宅が、いまや僕のふるさとだ。

父が在職している期間だけの、限られたふるさと。二十年もすれば確実に出て行かなければならない。そう思うと残念な気持ちになる。しかし毎日、学校に塾に遊びにと忙しくも充実した日々を送っていれば、いつか来るその日も笑って迎えることができるだろう。

だが、さすがに築五十年ともなると大規模な修繕が必要になる時期だ。建物も人も適切な手入れをすれば長生きできるのは同じ。実は今まさに何社もの業者がプレハブの事務所を構えて、一斉工事をしている最中なのだ。

外壁のひび割れを塗り直す、建物内外の配水管を交換する、地中のガスパ管を入れ替える。朝は単なる鉄パイプの山だったのが夕方の下校時には立派な足場に組み立てられている。まるで魔法のように。他にも消防設備点検や電気保安作業など、住まいを安全・快適に保つために必要な業務の多くは、僕が学校に行っている間に行われているので、あまり意識したことがなかった。住まいで問題が起これば僕は母に言うだけだが、解決には多くの人々の協力と連携を必要とする。普段は意識しなくても、人が生活する上で常に必要不可欠な存在に工事を通して気づくことができた。

そうした存在に感謝しつつ、住まいは共用地私有地問わず、もっと大事に利用すべきだと反省した。業者の方々が毎日作業場をきれいに清掃してから引き上げていくのを見るからだ。恒例の環境美化の日の清掃活動には毎回家族で参加しているが、自分達の住まいの安全は自分達で守ることを意識しながら清掃すれば、ただゴミ袋を一杯にするだけの今までとは違う発見があるかもしれない。